

南アジア寺院の調査

アジアにおける寺院の研究

研究課題としている日本中世寺院史研究を進展させるため、寺院建築の伽藍配置、なかでも堂塔と、僧衆の居住する僧坊の関係を中心として、建物配置や構造について、日本と外国の事例を比較検討する資料を得ることを目的に、インドおよびインドネシア所在の仏教寺院およびヒンドゥー教寺院・イスラム教寺院を実地に調査した。インドでは、東インドのビハール州、南インドのアーンドラ・プラデーシュ州、西インドのマハーラーシュトラ州の寺院遺跡の調査を行った。僧坊は、すべての遺跡遺構に遺存しているわけではないが、基本的には寺院においてはスタトゥー、大学においてはステジのような中心となるものをとりまく形で三面に構築されている例が多く、それらはすべて個別の房室が接続した形態をとる。それは西インドの仏教石窟寺院においても同様であり、南都諸大寺の三面僧坊との関係を伺わせる。そして一連の僧坊はおむねベット、テーブルなどその構造にも共通性がある。インドネシアにおいては、ジョグジャカルタ周辺、ゲドングソングを巡察した。例えば、ボロブドゥールのステウパは崇拜の対象であり、元来それを取り囲む僧坊も存在したかと思われるが、現状では確認できない。またプランバナン周辺のプラオサン寺は、南北2棟に分かれている寺院であるが、両寺の背後には連結している縁石の残存がみられ、僧坊のごとき居住施設かとも思えるが、中心寺院を囲む小寺院の可能性もあろう。僧坊と付属小寺院との識別も課題である。(綾村 宏)

アンコール文化遺産の調査

本年度は、上智大学アジア文化研究所の主催する、アンコール遺跡学術国際調査団の一員として牛川・杉山が現地での調査活動に参加した。本研究には、アンコール遺跡群のバンテアイ・クデイ遺跡の調査と、プノンペン芸術大学での学生指導という2つの目的がある。

8月の調査には杉山が参加し、プノンペン芸術大学において考古学の講義を行った。日程後半は、現地に移動し、バンテアイ・クデイ遺跡で小規模な発掘調査を行った。その結果、現在見られる遺構以前に、ラテライトを中心に組み立てられた前身遺構の存在することが明らかとなった。この遺構はラテライトで化粧を施した基壇上に建立されたもので、ラテライトの敷石を伴う。遺物の出土は少なかった。発掘調査終了後、現地保存事務所に保管される陶磁器の調査を行うことができた。しかし、フランス極東学院などが発見した陶磁器類の多くが、内戦の混乱期に所在不明となっていた。残されていたのは、小形の褐釉系陶器類が多い。なかには、中国産の白磁や青白磁も含まれていた。

3月の調査には、牛川と杉山が参加し、それぞれプノンペン芸術大学において専門分野の講義を行った。こうした人材育成を進めることによって、アンコールを含む遺跡の多くが、今後カンボジア人自身の手によって調査・整備されることが期待されている。(杉山 洋)